

## 辻岡克彦先生のご逝去を悼んで

川崎医療福祉大学副学長/岡山大学医学部第二生理学前教授/  
川崎医科大学名誉教授  
梶谷 文彦

川崎医科大学生理学教授、辻岡克彦先生は、平成20年7月21日咽頭部癌のため、60歳の若さで生涯を閉じられました。発病からあまりにも早いご逝去で、やり残されたことが随分あったのではないかと思ひ、残念至極です。

辻岡先生は昭和41年、大阪大学医学部に入学し、ボート部の名コックスとして活躍されました。何事にも論理的な彼にピッタリの部活だっただろうと思います。昭和47年大阪大学医学部を卒業、阿部裕教授主宰の第一内科学教室に入局されました。阿部教授は内科学に医用工学(ME)的手法を積極的に導入しようとしてされており、情報科学研究室(グループリーダー:古川俊之講師、後東大医教授)を立ち上げておられました。彼は情報科学研究室に所属し、研究と臨床活動をスタートしました。当時、私は第一内科教室と工学部電子工学教室の併任助手をしておりましたが、工学部で開いていた医用工学のミーティングに、理数系が強い辻岡先生は度々やって来て積極的に参加されていました。

昭和48年、臨床トレーニングのため大阪駅前にある桜橋渡辺病院に勤務し、南野隆三副院長に指導を受けられました。臨床の成果を、南野先生、堀正二先生(後阪大第一内科教授、現在大阪成人病センター総長)などと共に「冠動脈狭窄と心筋梗塞サイズの関係」について欧文誌に発表されています。これは彼にとって多分、初めての英文論文であり、思い出深いものと思われまふ。昭和50年に成人病センター集団検診部の小町部長の下で脳卒中が多発する秋田県の農村をフィールドとした疫学の研究に従事されました。疫学データを得



意の多変量解析を用いて解析し、脳卒中のリスクとして高血圧が重要であること、コレステロールの寄与は少なく、むしろコレステロールの低い群に卒中が多いことなどを指摘した研究は大変インパクトの高いものでした。その後、第一内科に帰局し、昭和54年助手に採用されておられます。

昭和56年から57年にかけて、ニューヨークのAlbert Einstein College of Medicineの心臓血管研究所(主任教授:E. H. Sonnenblick教授、指導教授:E. L. Yellin教授)にVisiting assistant professorとして留学し、ラット心筋標本を用いたレーザー回析法による心筋の筋節の動的計測を行われました。その時私は川崎医科大学に着任していましたが、訪ねて行ったニューヨークの研究室で、生き生きと実験に勤しんでいた彼の姿は大変印象

的でした。その日の夕べにアパートへ招待され、奥様手料理のロブスターがとても美味しかったことなどが昨日の出来事のように思い出されます。その後、ホテルに送って来た彼に川崎医大に来てくれないかと言ったことを覚えています。帰国後、阿部教授と当時情報科学研のリーダー井上通敏講師(後阪大教授を経て国立大阪病院院長を歴任)にお願いし、昭和58年に川崎医大の医用工学教室の講師に迎え、60年からは助教授として教室を支えていただきました。

当時、医用工学では、光ファイバー型レーザドプラ血流計を開発し、拍動するイヌの心筋の微小血管にファイバーセンサーを貼り付け、微小循環動態の計測を進めておりましたが、彼は大変論理的で、的確な見解には大いに助けられました。心機能に関して、彼独自のマイクロ曲率計測センサーを考案し、局所心筋仕事量に関する貴重な研究を行われました。その後教室で、針状プローブCCD生体顕微鏡を開発して心内膜側微小循環の観察に初めて成功した喜びを共有できたのも楽しい思い出になっています。

平成7年に生理学教授に就任されました。生理学教室では、動脈硬化の成因として重要な単球の血管内皮細胞接着、浸潤過程の共焦点レーザー顕微鏡によるライブイメージの可視化とメカニズム、動脈硬化好発部位でのNOやラジカルの動態などの解析を進めると共に、心機能に関しては、SPring-8の八木直人先生、岡山大学の清水壽一郎先生、毛利聡先生、国立循環器病センターの菅弘之先生などとX線回折によるアクチン/ミオシンの分子動態解析の共同研究を活発に進めておられました。辻岡先生は、統合生理学フィジオームの推進者でもありました。平成9年7月ロシアのサンクトペテルスブルグで開催されたIUPS1997のサテライトとしてNIHの援助のもとにペテロドレッドで催されたフィジオームの討論会に彼と一緒に参加したのを楽しく思い出します。その後の世界各地におけるフィジオームの展開をご承知の通りです。

学生には“受身になってはいけない”、“常に問題意識を持ち続けてほしい”と話し、講義では、時

に故意につじつまの合わないことを言って、学生の質問を待つこともあったそうです(山陽新聞インタビュー記事より引用)。これは彼の「ロジカルな考え方」を示すエピソードだろうと思います。

学会活動では、日本生理学会常任幹事、生理学会誌編集委員、生理学会将来計画委員会委員長、日本生体医工会理事、副会長などに任命され、国際的には国際医用生体工学連合の理事を務めておられました。彼はいくつかの学会の大会長を務められましたが、いつも斬新な企画の中にも暖かい雰囲気を出す良い会であったことが印象的でした。人的にも環境的にも社会的にも様々な問題が増しつつある現在、国内的にも国際的にも彼のこれからの活躍がおおいに期待されておりましたのに大変無念に思います。

辻岡先生は真摯で、いつも笑顔と平常心を失わず、気持ちのいい素直な男でした。長い付き合いでしたが、嫌な思いをさせられたことは一度もありませんでした。彼に感謝いたします。

辻岡先生の御霊の安らかならんことをあらためて祈念申し上げます。併せて、ご家族、ご親族の皆様、幸い多からんことをお祈りして追悼の言葉とさせていただきます。

#### 辻岡克彦 略歴

- |       |   |
|-------|---|
| 昭和22年 | 大阪市に生まれる  |
| 昭和41年 | 大阪大学医学部医学科卒業  |
| 昭和47年 | 大阪大学医学部附属病院内科医員(研修医)  |
| 昭和48年 | 桜橋渡辺病院医員  |
| 昭和50年 | 大阪府立成人病センター医員   |
| 昭和54年 | 大阪大学医学部第一内科助手   |
| 昭和56年 | Visiting assistant professor, Albert Einstein College of Medicine, New York |
| 昭和58年 | 川崎医科大学医用工学講師  |
| 昭和60年 | 同上助教授   |
| 昭和62年 | 日本循環器学会 Young Investigator's Award 受賞                                       |
| 平成7年  | 川崎医科大学生理学主任教授   |
| 平成20年 | 咽頭部癌のため逝去   |